

す。視覚障害者のために何かやるというのではなくて、たまたま友人の目が見えなくなったので、その人のために何かやっていたんです。

それがきっかけで横須賀市の朗読奉仕会で活動して、盲人の人たちと一緒に「声の図書」を作ったりしました。視覚障害者の方と仲間になると「図書室には、有名な本しかないけれど、おれたちは川上宗薫とか梶山季之なんか聞きたいんだ」と言われます。ふたりとも、官能小説や風俗小説といったジャンルの有名作家です。そういった本は図書室にはないので、声のライブラリーなら…と頼まれるわけです。わたしは「わかりました」と言って、読んだりしながら、視覚障害者の人たちに鍛えられました。

障害者差別を知って

ちょうど昭和48・49年というのは、施設に入れられた女性の障害者が、子宮を摘出させられるという事件のあった時代でした。施設に入れられた人たちの状況がどう

なっているのかと思いました。

そのころに「青い芝の会」(注)の活動や「母よ殺すな」という本などを読み、障害児が親に殺されるってどういうことなんだと考えることがありました。親というのは子どもがどういう状態で生まれても、育てるのが親じゃないか。

それなのに障害児が生まれたというだけで殺してしまい、それが裁判の判決ではしょうがなかったという結果になる。障害児が生まれた苦勞を親が全部背負っていくのは大変だから…と、どちらかという、世の中が殺した親に対して理解を示す風潮がどこかにあった。それに対して「青い芝」の人たちは、冗談じゃないよという運動があったんです。

蛭名先生から学んだこと

目が見えなくなった友人と飲んだ時、一番つらかったのはなに？と聞いたら、「自殺ができなかったこと」だといっていました。そ

(注)

青い芝の会：全国青い芝の会。脳性麻痺の方による障害者団体

して、見せてくれた彼の腕には傷がいっぱいあった。切っているけど、見えないから本当の意味で死ねないんですよね。どこにガスの栓があるのか、どこに包丁があるのかわからないんですよ。

そういう状況のなかで、わたしは将来福祉関係の仕事につきたいと思っていました。横浜にある施設へ就職したくて、大学3年生の時に館長の蛭名先生のとこるに就職をお願いにいったんです。

蛭名先生は全盲ですが「もし君が一生視覚障害者として生きていきたかったら、福祉の仕事に入ってはいけない」といわれました。なぜですかと聞くと「井の中の蛙大海を知らずで、学校の先生が教育が見えないように、政治家が政治が見えないように、親が子どもたちを見えないように、そのなかにどっぷり浸かってしま

うと、そのものの本質が見えなくなってしま



覚障害者として生きていくならば、それを「なりわい」としてはいけません。そのなかにどっぷり入ってはいけません」といわれました。

蛭名先生からはいろいろなことを気づかせていただきました。昔横浜のガード下で、われわれ学生と蛭名先生で飲んでるときに停電になったことがありました。わたしたちが騒いでいたら、先生が「目明きというものは不自由なも